

【学校教育ビジョン】
自ら学び、判断し、行動する金明っ子の育成

【めざす児童像】

よく考え、自分から動く子

・自ら学びに向かう子（「学びたい！わかるようになりたい！」という児童の学びへの意欲を支える

自律した学びで育てる 個別最適な学習と協働的な学びの一体的な充実を目指す）

・自分で考え行動する子（主体的に考え行動する場づくり 居心地のよい学校・学級づくり 生徒指導の4つの視点を生かした教育活動を推進する）

・たくましい子（挑戦する意欲、最後まで粘り強くやり抜く力を育む 自分の命を自分で守る意識と実践力を高める 健康や安全に対する意欲・知識・実践力を高める）

評価の項目	今年度の重点目標	具体的な取組	主担当	現状及び取組状況	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	備考	判定結果(中間)	判定結果(最終)	今後の改善策
①教育課程・学習指導	児童に学びを委ねる授業づくり	・自律した学びを目指して個別最適な学びと協働的な学びの充実を図る。	研究主任	6年間を見通した「自律した学びの姿」の共有により、児童は集中して学ぶ姿勢や自己選択の力を伸ばし、多様な仲間と学び合う姿が見られる。一方で、学びの広まりや深まりにつながる相手の選択や、SOSを出しにくい児童に対する支援が必要である。	【成果指標】・学び方のめあてをたて、次につながる振り返りができる。	自分で学び方のめあてをたて、振り返ることができたと回答した児童が A 85%以上 B 80%以上 C 75%以上 D 75%未満	1・2学期末に、児童を対象にアンケート調査	A		肯定的な回答(A・B)の割合は引き続き高いものの、昨年度の結果と比べると「B(ややでまじる)」の割合が増加しており、学びの自覚がやや停滞している様子がうかがえる。次の学期に向けては、児童が自分が学びの主人公であると実感できる学習環境を整えることが重要である。そのためには、子ども自身の意識だけでなく、教師の意図的な働きかけが鍵となる。特に、教師が「自律した学び」に必要な力のどの部分を授業で育てるかを明確にし、支援や声かけの質が高まるところを意識する。今後の実践においては、各クラスの実態に応じて授業の中でどの力を特にねらうかを明確にしたうえで学期に臨む。また、学期のスタート時に児童と目標を再度共有することで、自覚的な学びの定着を図っていく。
	基礎・基本の定着	・計算チャレンジで、計算力の定着を図る。	教務主任	児童は課題に真摯に取り組み、基礎・基本の定着が着実に図られている。今後は繰り返しの練習を通して、さらに自信をもって活用できる力を育てていく必要がある。	【成果指標】・児童が計算の基礎・基本を身に付けている。	計算チャレンジ(1年2年は、計算3分プリント)の正答率80%を超える児童が A 95%以上 B 85%以上 C 75%以上 D 75%未満	計算チャレンジ・計算3分プリント(7月 12月)	B		1学期末確かめテストの知識・技能の結果では、正答率80%以上の児童の割合が88%であった。計算チャレンジで基礎的な計算力は定着している。2学期は、計算チャレンジで苦手な計算を中心に習熟を図り、個別の支援が必要な児童には級外や支援員と調整しながら児童に合った適切な支援を実施していく。
②生徒指導	居心地のよい学校・学級づくり	・児童の、児童による、児童のための学校づくりを推進する。	児童会	児童は授業に限らず、行事や特別活動にも主体的かつ意図的に取り組んでいる。今後は、昨年度の実践を土台に、より創造的で自治的な学校づくりを児童自らが力強く進められるよう、教師は一步引いて見守りつつ、的確に支援していく。	【満足度指標】・児童が「学校は楽しい」と感じている。	「学校は楽しい」と思う児童が A 85%以上 B 80%以上 C 75%以上 D 75%未満	1・2学期末に、児童を対象にアンケート調査	A		「学校が楽しい」と感じる児童は95%から83%にやや低下した。今後は、児童会の議題を精選し、全員が目標を意識して取り組めるようにする。また、児童全員で企画した活動を早期に振り返る時間を確保し、達成感や学びを実感できるようにしていく。
	いじめ・不登校問題への組織的な対応	・いじめ、不登校の問題に対して、組織的に対応し、未然防止・早期発見・早期対応及びその記録に努める。	生徒指導主事	児童は概ね落ち着いて学校生活を送っているが、中には人間関係や学業に対して不安な思いをもっている児童が一定数いる。児童の思いを知り、受け止め、真摯に向き合っていくには、組織的な対応が必要となる。情報の共有や記録の体制を整え、全教職員で対応にあたる。	【満足度指標】諸問題の未然防止・早期発見・早期対応及びその記録の取り組みが、組織的・協働的かつ日常的に行われている。	アンケートや面談の実施が、諸問題の対応に役立っていると回答した教職員が、11人中 A 11人 B 9~10人 C 7~8人 D 6人以下	1・2学期末に、教職員を対象にアンケート調査	A		アンケートを実施し、気になる回答があった児童には、個別に面談をして話を聞くことで、児童理解や問題の把握に努めることでいる。また、職員室での情報共有が日常的になされており、担任が一人で抱えることなく組織的に対応できる体制もある。今後、更に生徒指導主事が教職員と連携して記録を残していく、切れ目のない支援体制を構築していきたい。
③キャリア教育・進路指導	自己肯定感・自己有用感の向上	児童に感謝の気持ちを伝えるため、日々の活動や特別活動を通じて、個々の努力や成果を認め、励ます声かけを行う。	キャリア教育	日々の学校生活や行事において、自分の目標を意識しながら取り組み、達成度を振り返る姿が見られるようになってきた。今後は、特別活動や委員会、清掃などを通じて「人の役に立つ喜び」を実感できる機会を大切にし、自己有用感を高め、自信や次の目標につなげていけるよう支援していく。	【成果指標】児童が誰かの役に立つ喜びを実感している。	「誰かの役に立つうれしいですか」と思う児童が A 85%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	1・2学期末に、児童を対象にアンケート調査	A		「人の役に立つことはうれしいか」というアンケートでは、肯定的に回答した児童は90%となった。今後も、行事や日常の活動において、教師が児童のよい行動や思いやりをその場で価値づけ、振り返りを通して児童自身が喜びや成長を実感できるよう取り組んでいく。特に人権週間では、よい行動を見ついた教師がその場でカードを贈る活動を行い、児童の意識化・自覚化を図っている。
④保健管理	健康に対する意識・実践力の向上	計画的な指導により、健康的な生活習慣を身につけ、健康に過ごすようとする意識・実践力の向上を図る。	保健主事 養護教諭	メディアのルールについて、学級での指導により正しい知識・技能を身につけるとともに、自ら実践しようとする意識や態度を育てる必要がある。	【成果指標】児童が自ら生活習慣を改善しようとしている。	メディアのルールの改善について、自分なりに考えて取り組むことができたと答えた児童が A 85%以上 B 75%以上 C 65%以上 D 65%以下	1・2学期末に、児童を対象にアンケート調査	A		アンケートの回答を見ると判定はAであるが、自分で決めるメディアの使用時間には明確な目安がなく、個人差が大きい実態がある。今後、自分で時間を設定することに加え、身体への影響も踏まえて適切な使用時間について考えさせていく。そのため、養護教諭の保健ミニ指導や学校保健委員会等の機会を捉えて指導・支援をしていく。
	体力・運動能力の向上	金明マラソンや1校1プランの取組により体力・運動能力の向上を図る。	体育	昨年度の体力テストでは、20mシャトルランの記録が県平均を上回る学年が多くたものの、記録や意欲の個人差は大きい。本校の伝統である金明マラソンを充実させることで、児童のさらなる体力向上を図りたい。	【成果指標】20mシャトルランの記録が6月に比べて上がった児童が	20mシャトルランの記録が6月に比べて上がった児童が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	6月、11月に4年生以上の児童を対象に計測			年度内の比較により判定するため、最終判定結果のみとする。金明マラソンでのタイムトライアルの実施で、児童の意欲の向上、継続を図ることができたので、2学期もマラソン大会に加えて継続実施していく。
⑤安全指導	計画的な安全教育と避難訓練の実施	どのような行動をとることが安全なのか、自ら考え行動できる力を高めるために、訓練の前に避難の際に必要となる知識を伝え、訓練後に振り返る時間を設定する。	教頭	年間を通して、計画的に避難訓練を行っている。児童が自ら考え行動しようとする意識の向上を図るために、事前学習を取り入れて、自分の命は自分で守るという意識やそのためには何が大切かという知識を身につけるため、事前の安全学習は継続して行う必要がある。	【成果指標】児童が、生活、交通、災害に関する様々な危険の要因や事故の防止について理解し、進んで安全な行動ができるよう努めている。	自分の身は自分で守ることができたと回答した児童が A 90%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	1・2学期末に、児童を対象にアンケート調査	A		1学期の火災避難訓練では、火災に関する事前学習を行い、計画的に訓練を実施した。児童の93%が自分の身は自分で守ると回答しており、防災意識の高まりがみられた。2学期は地震避難訓練、不審者対応訓練、保護者への引き渡し訓練を行う予定である。安全確保の方法を明確に示し、いざとなつたときの身の守り方にについて、自分事として考えられるようにする。
⑥特別支援教育	個に応じた支援の充実	配慮が必要な児童についての情報・効果的な支援の在り方を共有し、個に応じた支援を行う。	特別支援教育コーディネーター	定期的に校内支援委員会を開き、支援の方法を検討する。SC、巡回相談員、専門相談員などとつなぐ際には、継続して見ていたり支援の方法を共有していく。夏休みなどを利用し、教職員での研修を行う。	【成果指標】SC、巡回相談員、専門相談員などから助言していただいた支援内容や方法を校内支援委員会で共有し、実践したことに対する児童の変容が見られたと感じている。	支援内容や方法を実践しようと努め、そのうえで児童の変容が見られたと感じた教職員が10人中 A 8人以上 B 7人 C 5~6人 D 4人以下	1・2学期末に教職員対象にアンケート調査	A		SCや育成センターの先生方に助言していただいた支援方法を、各担任に周知したり、支援会議を定期的に実施して支援内容を考えることができた。今後も、ユニバーサルデザインや発達特性に対する支援に関する情報を共有し、個に合った支援を目指していく。
⑦組織運営・業務改善	業務の効率化	効率的に業務にあたるために、部会や主任会の計画的な設定や放課後時間を確保する。	教頭	昨年度より日課の工夫による放課後時間の確保に努めてきた。学校研究や学級事務に関わる業務を行うことができた。今年度も教務と連携し日課の工夫を行い、見通しをもった業務の遂行に努める。	【成果指標】月予定や年間予定を見通し、日課の工夫による放課後時間の確保を生かして効率的に業務を遂行することができたと回答した教職員が10人中 A 8人以上 B 7人 C 5~6人 D 4人以下	1・2学期末に教職員対象にアンケート調査	A		放課後時間の確保は、授業準備、指導案作成や児童についての話題を話すことなど、効率的な業務の遂行に役立った。多岐にわたる業務内容により、多忙化の意識は依然として高いので、教職員の心理的なゆとりを少しでも感じられるよう、日課を工夫し放課後時間を多くとることができるように教務主任と連携する。	
⑧研修	若手教員の育成	日常的OJTを意識して、若手教員相互による学び合いを行う。	教頭	若手教員が4名おり、うちⅢ期の教員が3名である。若手研修のリーダーを中心とした日常的なOJTを進め、相互の学び合いや指導力の向上を図る。全教職員で育成のための指導・助言がある。	【成果指標】普段から若手教員相互による学び合いや全教職員の指導・助言をすることができた。	日常的なOJTを意識して相互に学び合うことができたと回答した教職員が10人中 A 9人以上 B 8人 C 6~7人 D 5人以下	1・2学期末に教職員対象にアンケート調査	A		学校研究が実践に結び付き、日常の授業や児童について普段から職員室で話し合う雰囲気が生まれた。相談事や分からぬことを話すことができるコミュニケーションもあり、良好な職員集団である。今後も児童をより良い方向へ導いていくためにも、互いに学び合える関係づくりを管理職や主任層を中心に意識する。
⑨保護者、地域との連携	開かれた学校づくり	学校と地域の要望を相互につなぐためにCSCとの連携を図る。	教頭	昨年度は授業サポートとしてまちの先生を依頼してきたが、教科や学年の広がりをもたらすために計画的にサポート依頼を行うと、開かれた学校づくりにおいてより効果的である。	【努力指標】計画的に、必要に応じたまちの先生の依頼に努めている。	必要に応じたまちの先生の依頼に努めている教職員が10人中 A 8人以上 B 7人 C 5~6人 D 4人以下	1・2学期末に教職員対象にアンケート調査	A		図工や家庭で、安全面を確保しながら、個々の課題をフォローできる対応ができた。単元を年間を見通したまちの先生の要請ができるよう、記録を残すなどの工夫により次年度に引き継いでいくとい。
⑩教育環境整備	児童の意欲を高める環境デザイン	児童が学びの主体として成長できる環境づくりを進め、自己選択を尊重し、意欲的な学びを支える場作りを行う。	教務主任 研究主任	昨年度は、環境設定に努めたと肯定的に回答した教職員が100%であったが、すべての児童に効果的だとは言い切れない。児童一人ひとりがより主体的に学べるよう、教科のねらいや実態に即した環境デザインを工夫する。安心して思考を表現できる人間関係や空間、見通しをもたせた教材提示、多様な学び方を選べる柔軟な学習環境を通して通じて、自ら学びを深める力を引き出す場を創出する。	【努力指標】自律した学びを進めることができる環境づくりに努めている。	環境づくりに努めた教職員(机等の配置やヒントカード)が9人中 A 8人以上 B 6~7人 C 4~5人 D 3人以下	1・2学期末に教職員対象にアンケート調査	B		単元構想部会において、教科のねらいを明確にするために、他教科との比較や学習指導要領との関連を踏まえた教材研究を行う。さらに、児童一人ひとりの特性や人間関係を的確に理解し、その学びの姿を見取ることを重視する。こうした児童理解と教科理解を統合した単元構想を通して、授業中の柔軟な指導修正や学びの環境デザインにつなげ、児童の主体的な学びの実現をめざしていく。

学校関係者評価	
---------	--